

教育における世代論

河 野 員 博

はじめに

一般に、何ほどかの文化あるところ教育ありと考えてよいほどに教育現象は普遍的であるにもかかわらず、それを世代論的観点からとらえようとする試みは少ない。例えば、細谷恒夫は次のように言う。「一定の生活圏の内に、いくつかの異った『世代』が同時に生きているという事実は、教育学的に見て最も重要な根源現象の一つといえることができる。」⁽¹⁾一定時点における世代の複在をいう場合、ごく普通には、三世代の同時存在が仮定されるわけであるが⁽²⁾、そのような「相異なる世代が同時に生活するという事実そのものによって無意識的に、無意的に、最も広汎な範囲において教育は行はれ」⁽³⁾るのである。

そこでわれわれは、「世代」なるタームの定義を確認しておく必要性に逢着する。古典的ではあるが代表的な例としては、ディルタイ（Dilthey, W.）のものがある。彼は言う。「世代とは、『個々人のもつ同時代性という状態』に対する一つの表示である。つまり、ある程度まで同時に成長する、共通した幼年時代をもち、時としてその時期が雄々しい力の現われでもあるような共通の青年時代とかをもつようなものを、われわれは、かかる世代として特徴づける。」⁽⁴⁾このように、世代は時を同じくする運命共同体的存在ともいえる。その意味では、「世代は……階級にきわめて近い性格をもっている」⁽⁵⁾こともあるし、歴史の動きに何らかの関わりを有する潜在的思想集団の意味あいも秘めている⁽⁶⁾。かかる定義の上に思念される世代のスコープが、最早一世代三十年説を即前提するものではなく、「今やせいぜい十年の広がりを持っているにすぎない」⁽⁷⁾ことを、敢えて指摘しておきたい。

1. 青年と世代論

以上の前提に立った上で、更にわれわれは青年と世代論との関連に触れねばならな

教育における世代論

い。というのは、厳密にはほとんどすべての年齢において、それ相応の世代が存在することを仮想できるからである。にもかかわらず、「およそ世代をめぐる論議ないしは談議というものは、つねに青年を軸としておこなわれ」⁽⁸⁾、逆に言えば、「青年をめぐる議論は、たえず『世代』論へのベクトルを秘めている」⁽⁹⁾のである。この間の事情はいかように解すべきか。それへの端的な回答は、マンハイム(Mannheim, K.)の言のうちに垣間みることができる。つまり、「静態的社会の場合は、統一目標のもとに現実統合化が行われることもなく、また歴史的役割が青年に課せられるということもなく、思春期を無自覚のうちに過ぎさせるだけの余裕がある。しかし動態的な社会では、その目標に精神的な意義を与えるために、もっとも大切な存在である青年を無視しては何もやってゆくことができない。」⁽¹⁰⁾例えば、青年が進歩的にもなりうるし、逆に保守的、反動的にもなりうるということは⁽¹¹⁾、彼らがそれだけの潜在的可能性を常に秘めた社会的に柔軟な存在であることを意味する。この事実は、決して青年の無規律さを露呈するものではなく、飽くまでも人格形成上における青年の可塑性の大きさを示唆するものであり、その意において、青年を一つの刻印的性格をもった世代として見るのは十分理由のあることと言える。しかり、「青年期までの社会化を基礎として始めて世代は社会的存在となることが可能になる」⁽¹²⁾のである。

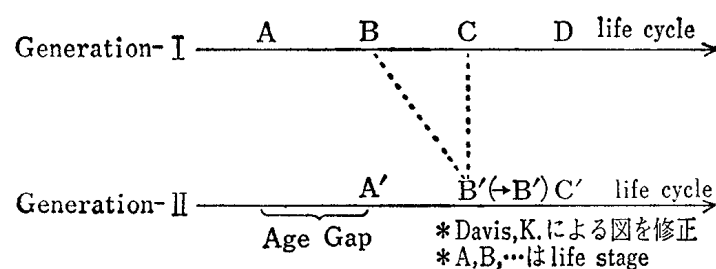
そこで次に、世代に対するこうした接近の仕方を、一つの論、つまり世代論として今一度検討に付してみよう。世代というタームのあいまい性、多義性、そして歴史被拘束性は、当然のことながら世代論自体のアイデンティティを不明瞭なものとしている。更にそのことが、実は冒頭にも若干触れた如く、教育現象における世代の問題意識化、及び世代論における教育現象のとらえ直しという作業に一抹の不毛性を投げかけることにもなっている。確かに世代論と称する論議がないわけではない。しかし早坂泰次郎もいうように、「世代論の学問的なとりあげ、その体系化は洋の東西を問わず、系統立ったものではないように見うけられる」⁽¹³⁾のが、実情であろう。なぜそうなのか。われわれはその理由を、世代論自体を不用意に貶価することで安易に処理してはならない。例えば、日高六郎は日本の戦後世代論を三つの系列に整理してみせる⁽¹⁴⁾が、そこでは世代という言葉のもつ重みが十分に意識されている⁽¹⁵⁾。問題なのは、確かに日本の戦後世代論は戦争責任とのかかわりでジャーナリスティックにとりあげられた経緯をもつが、論争の契機の余りの意表さに、かえって世代論がある種の偏向を経験せざるを得なかったことにある。つまり、戦争責任などと結びついた世代論は、世代論としては危機的様相を帯びた一つの論議の具象化したものであって、それがすべてではない。ここに、世代論の不幸が存在し、それ故に、こと日本の場合はある程度の学問的不毛さを招来したと考えられる。

このことを、少しく敷衍してみよう。大野明男によれば、一般に社会学者のパーソナリティ論は、「静態的な分析にとどまり、自己形成のプロセスのような、いわば『時間的な機序』を十分に解明していない」⁽¹⁶⁾とされる。換言すれば、人間形成過程

における最大の影響要因たる世代への正当な配慮が欠如しているとの指摘にはかならない¹⁰⁰。この場合、彼の言葉の背後には、実は次のような洞察が控えていることは当然に想起されてよい。すなわち彼は、「これまでの『世代』論議が、それぞれの世代に属する人の『世代的な自己主張』としてだけ展開されてきた」¹⁰¹とみている。こうした形での一種安逸なる自己主張は、更に早坂の目には、逃避のための世代帰属意識として映じる。彼によれば、「人びとは、内面化した意味体系の混沌、価値矛盾の不安から逃れるために、『世代』をもとめ、意識するのである。」¹⁰²そしてこのことは、ともすれば個々人を世代の枠に押し込める危険性を有しているとし、「世代論的人間観には、一種の社会学的決定論がともなう」¹⁰³と極言する。しかし、早坂の言は、曲解された世代論の横行を嘆くものではあっても、世代論の本質をとらまえた上での論議としては、やや問題があろう。むしろ、「世代論それ自体が流行の思想になるといった日本の思想状態」（日高六郎）を不健康なものに見据えた上で、次のように解釈する方が、正鵠を得ていると考えられる。「世代的実感は傍観者の無責任さから自分をときはなつテコになる。しかしその意味で世代的実感から出発するのは正しいが、解決の場所をそこに求めることはまちがっているだろう。」¹⁰⁴ここで日高がいみじくも「世代的実感」と表現しているものこそ、これまでの当該アカデミーがとかく避けてきた一契機であり、本稿で問題にしたい理由も、一つにはその契機のもつ発展的性格に着目するからである。そして更に言及すれば、世代論が社会的ポテンシャルティーを秘めた青年を主題とする際に至っては、日高のいう「世代的実感」への看過がただちに重大な意味を帯びてくるのである。この意味において、「一般的な青年世代論には青年の教育や社会化の問題についての視点が原則的には欠落している」¹⁰⁵とする小林文人の指摘は、当を得ていると同時に、諫言に値する。

2. 世代のメカニズム

世代という概念に潜むターミノロジカルな生産性に気付いた上で、更にわれわれは世代の現象形態に一瞥を与えなくてはならない。その際、デービス (Davis, K.) の論稿が有効な手がかりとなる¹⁰⁶。図は、典型的な二世代のライフサイクルを示し、Generation- I 及び Generation- II は、それぞれ親と子の世代を表すものと考えてよい。



教育における世代論

ところで彼は、現代西欧社会における親子間の葛藤の原因を、ある種の定数と変数との相互作用に求める。その際、彼が定数として呈示するものは、家族の継起 (the family's duration) と社会化度の逡減 (the decelerating rate of socialization) であり、もっとも重要な変数としては、社会変動率 (the rate of social change) を挙げている。家族の継起が存在するということは、つまり定位家族から生殖家族への移行が常に親子間の年齢差を現出することを意味し、また社会化度の逡減が存在するということは、ライフサイクル上のある時期以降、個体の社会化されてゆく度合が確実に低下することを示し、したがって特定時点における親子間の社会化度には必ずギャップが生じることになる²⁴。これら二つの定数に対して、当該社会固有の歴史が変動率として加味されることにより、両世代の葛藤現出図式が描かれるわけである。ここで注目したいのは、デービスの次の言葉である。「或る一定の時期においてみれば、親と子は異なった発達段階にいただけでなく、現在子が属している段階のとき親が得た (文化) 内容が、現在子の獲得しつつある内容とは違ったものになってしまっている。」²⁵ このことは重要である。なぜなら、われわれが普通、世代のギャップを問題にする場合、ともすれば図の「C—B'」の関係を想起しているか、あるいは「C—B'」と「B—B'」との混同された関係を想起しているからにほかならない。もちろん、現実には「B—B'」の関係は間接的にしか存在しえないため²⁶、常に「C—B'」の関係が世代差を評定する際の素材となる²⁷が、しかしその操作は多大な注意を必要とする。つまりこの場合、到達した発達段階上の差 (B段階とC段階との差) によるバイアスと、同じ発達段階時に体験した文化内容の差 (B段階どうしの差) によるバイアスとが互いに相乗し合って、「いわゆる世代差」が現出するわけである。更に言えば、停滞社会では、BとB'がほぼ等しいため「C—B'」の関係が上述の意においてはさほど問題化しないが、急性変動社会 (二関隆美) に至っては、概念の混同という実害をもたらすのである。しかし、かかる概念の混同をしない限りにおいて、いわゆる世代の問題は、一般にどのように扱われえるのであろうか。この問いに答えることによって、世代のメカニズムを更に追求してゆくことにする。

先ず、図の「C—B'」関係を主たる世代関係とみる立場に即して述べてみよう。その際、基本的にこの関係に立脚していると思われるアイゼンシュタット (Eisenstadt, S. N.) の説明を借りれば²⁸、彼は、年齢による人間関係のタイプが歴史的に変遷するとして、一般に年齢異質的 (age-heterogeneous) な関係から年齢同質的 (age-homogeneous) な関係への変化を主張する²⁹。前者の関係においては、家族や親族が社会の有力な単位であり、年齢に即応した役割配分が整然と為される。一方後者の関係は、家族や親族のような帰属的単位の役割が低下し、それに伴い業績志向型社会が到来するにつれて、一般化する³⁰。このように考えるとき、かかる年齢異質的關係の優勢な社会では、本来深刻な世代間葛藤は起こりえないはずである。なぜなら、そのような社会では、世代の差を巧みに社会体系の維持存続機能として組み込むことに成

功しているからである。ところが、年齢同質の関係が優勢な社会においては、ただちに世代差が問題となる。その重要な契機としては、個人や社会に対する観点の年齢差が挙げられる⁸¹⁾。

ところで、アイゼンシュタットのタイプづけよりはるかに「C—B'」関係を強調する見方がある。そのもっとも簡潔な表現は、シェーラー (Scheler, M.) にみられる。「年少世代にたいする年とった世代の位置は、つねに、一般的にルサンチマンの危険をはらんだ境遇である。」⁸²⁾つまり、「このごろの若い者は……」という年長者の嘆息めいた表現がいつの時代にも為されるように、若者への羨望が逆に怨念へと反転するメカニズムは、歴史を超えたものであり、したがってそれは「C—B'」関係をよく表現しえていると考えられる。更にこの「C—B'」関係を、ドラスティックな例としてわれわれの前に呈示するものが実は学生運動である、というフォイヤー (Feuer, L. S.) の仮説がある。「学生運動は世代運動である (A student movement is a generational movement.)」⁸³⁾と定義づける彼の分析は、一体どのようなものなのか。フォイヤーの場合、先のシェーラーによるルサンチマン解釈の線上に立脚するものではあるが、方向は逆である。つまり、フォイヤーは、学生の側からの年長世代に対するルサンチマンを強調するのであり⁸⁴⁾、学生運動にしばしば盛り込まれる若々しい愛の動機、崇高な理想の呈示は、実は「学生が父親に反抗することによってひき起こされるすさまじい恐怖を少なくしようとする」⁸⁵⁾ための補償にほかならない、とする。こうした彼の精神分析的 (psychoanalytical) な解釈は、更に多くの学生運動をして、理想の放棄と現実への直面を強制させられる若者たちに特有な「放棄外傷 (a trauma of renunciation)」の現れである、とする⁸⁶⁾。このような、いわば世代間の葛藤を年齢差に基づく心理的な枠組で解釈しようとする立場は、葛藤を育む歴史性よりも葛藤の普遍性を強調しようとしている点で、一応「C—B'」関係を世代現象の核と見ているものと考えられよう⁸⁷⁾。

一方、これに対して「B—B'」関係に主眼をおいた世代把握の立場はないのであろうか。しかし、ある意味でそれは愚問である。なぜなら、今や古典の位置を占めるマンハイムの世代論はいわずもがな、もともと世代論なるものの本領はそこにあるからである。オルテガ (Ortega y Gasset, J.) は、世代を「歴史が回転する枢軸」⁸⁸⁾とまで言い切る。言うまでもないが、世代の連鎖という現象には、社会の維持発展を前提とした上での文化伝達が伴い、しかもその過程は特定の歴史的脈絡のうちに、時に平穏に、時に劇的に進行する。ここに言う文化伝達は、個人のパーソナリティ次元に焼き直せば社会化とほぼ同値であるが、いずれにせよこの過程はライフサイクル上のある時期、つまり青年期までに最高の密度をもって推移する。もっと言えば、そのような生成しつつある世代のもつ可能性はつとにアカデミー、とりわけ社会学の対象であったのである。マンハイムが知識社会学的観点から世代に着目したのは、シェルスキー (Schelsky, H.) 流に言えば飽くまで「社会の側からみた」世代論へのアプローチ

教育における世代論

ではあった⁴³⁾にしても、そのような社会学からのアプローチのうちに教育学的視点がまったく読みとれないわけではなかろう。否、それどころか、例えば新睦人による世代研究の大義名分づけには、教育を社会的に究明するための示唆が十分うかがえる。彼は言う。「我々が世代を研究する事の意味は、それぞれ独自の文化に支えられた歴史の主体の一つとして、その全体社会構造に参加する未来的可能態を、社会の実質的脈絡で位置づける事にある。」⁴⁴⁾ しかるに、彼のいうかかる「未来的可能態」が、それぞれに歴史の中をくぐり抜け「今日的現実態」になることこそ、人間形成そのものではないか。

ところで、指摘しておきたい一つのポイントがある。高原健吉はそれを世代概念の発生を問う文脈中で、いみじくもこう語る。「世代の概念は……〈歴史的には客観的事実というものはない〉という認識から……起こっているのだ。」⁴⁵⁾ これは一片の真理を突いている。日高が世代論の流行を嘆き、大野が世代論にことよせた安易な自己主張を突き、更には早坂が世代論への逃避を指摘するのは、すべて高原のこの含蓄ある洞察と深い結びつきをもつ。しかしここでは、その点についての詮索をする余裕はない。それよりもここで重大なことは、とりわけ疾風怒濤の時期たる青年期に、その人間の認識・行動様式の鋳型が形成され、しかもそのことが一つの「世代感覚」（松下圭一）⁴⁶⁾ として刻印づけ（imprint）されるという事情である。そして、そのような経緯が高原のいう内実としばしば結びつくとき、われわれは単なる年齢差や心理的メカニズムに基づく世代間葛藤とは異質な「世代間葛藤」を想定することができる。実は、それが本稿でいうところの「B—B'」関係の実体なのである。先に日高が「世代の実感から出発するのは正しい……」⁴⁷⁾ と指摘した点を本稿が評価したのは、かかる意味合いからであった。この「B—B'」関係の具体例としては、典型的にはアイゼンシュタットも指摘するドイツ青年運動が挙げられるであろう⁴⁸⁾。もちろん、青年運動には様々な形態があり、それらすべてを「B—B'」的世代運動とみなすわけではない。しかし、「世代の問題は……社会運動や精神運動の構造を理解するためには、欠くことのできないひとつの指標」⁴⁹⁾ であり、また「青年運動の正しい理解は、それをその運動が進行した社会の社会変化の文脈のなかでとらえることによってのみ得られる」⁵⁰⁾ のである。つまり、世代の対立を、「古い思想に対する新しい思想の対立」⁴⁷⁾ として見ることができるという点で、ドイツ青年運動はここでいう典型であると思われる。

3. まとめ

以上の考察は、世代の問題を構成する中心点が多くの場合、世代間の断絶であり⁴⁸⁾、そしてそこから生じる世代間の葛藤であるという前提に基づいている。しかし、その葛藤の内実はすでに見てきたとおり、実は理念的に抽出される二つの関係（「C—B'」及び「B—B'」）から成立している。そしてそれらの関係のバランス度に応じて、世

代間の葛藤も様々な様相を呈する。具体的な例でいえば、一方の極には、注⁵⁷でも触れたように高度にコーディフィケートされた科学の世界で展開する世代現象から、他方の極には、生活体験知に基づく社会意識の次元で生じる世代現象に至るまで、多様である。つまり、世代現象はそれがどのような問題領域⁵⁸をめぐる展開しているかによって、当然それに対する理解のされ方が異ならねばならない。

このことは、教育実践の場を想定するとき重要となってくる。青年に対処する親の場合を端的に想定すれば、例えば本来心理的理由あるいはルサンチマンなどに起因する葛藤を、単なる親子間のキャリアの差に由来する葛藤として処理しようとするケースがある。逆に、キャリアの差に主として起因する葛藤を、単なる個体発達上の差による葛藤として処理しようとするケースもあろう。人間は、葛藤をできるだけ避けたいとする本性をもつ。上記の二つのケースでは、葛藤の根源が問われることなく、逆に回避できない葛藤が安易に仮想され、したがって時として不合理な対処を蒙るという経路をしばしばたどる。しかも、その際仮想された葛藤は、両ケースで異なる原因に基づくにもかかわらず、いずれの場合も「いわゆる世代差」として片づけられる。昨今、世上かまびすしく論ぜられる親子の断絶の一因は、このような点にあるのではなかろうか。

先の図を今一度参照したい。今日は、政治的にも、文化的にも激動の時代である。つまり、歴史の推移が加速度的に進行しているわけである。とすれば、「C—B'」関係が本質的にコンスタントな世代差を意味するのに対して、「B—B'」関係は、確実に拡大してゆく世代差を示す。加うるに、エリクソン (Erikson, E.) のいう心理社会的モラトリアム (psychosocial moratorium) によって青年期が延長されるということは、B' が C' にいびつな形で延びることに等しく、当然、「B—B'」的世代差の拡大に拍車をかけることにもなる。このことは、世代の継起を通じて社会的未成熟者を育むという人間特有の役割行為⁵⁹を阻害する方向に機能する⁶⁰。もちろん、歴史を変えることと世代論は直接には無関係である。しかし、歴史が変わることと世代論は有機的に結びつかねばならない。そして、そのことによって「各世代が相互に鏡となって徹底的な自己認識をし」⁶¹、もって激動期における教育の一助たらねばならない。

〔注〕

- (1) 細谷恒夫「教育に於ける『世代』の問題」東北帝大文学会編『文化』第9巻第4号、1942年、293頁。
- (2) 三木清「文学における世代の問題」大内兵衛ほか編『三木清全集』第11巻、岩波書店、1967年、252頁。
オルテガ（生松敬三訳）「哲学とは何か」『オルテガ著作集』6、白水社、1970年33頁。

教育における世代論

- (3) 三木清, 前掲書, 253頁。
- (4) Dilthey, W., “Über das Studium der Geschichte der Wissenschaften vom Menschen, der Gesellschaft und dem Staat”, ‘Gesammelte Schriften Band V (2Auflage)’, B.G. Teubner, 1957, S. 37.
- (5) 青井和夫「青年社会学」福武直ほか編『社会学辞典』有斐閣, 1958年。
- (6) 高坂正顕「思想史の方法概念としての世代の概念とその取り扱いについて」武田清子編『思想史の方法と対象』創文社, 1961年, 56頁。
- (7) ケニストン, K., (高田昭彦ほか訳)『青年の異議申し立て』東京創元社, 1977年 55頁。

このほか, 1世代10年説については, 次を参照。大野明男『世代論』, 三一書房, 1975年, 139頁。

- (8) 米山俊直「世代の自然史的な考察」, 『思想の科学』, 1966年1月, 40頁。
- (9) 橋本敏雄「戦後世代論をめぐる思想状況」, 濱島朗編『現代青年論』, 有斐閣, 1973年, 284頁。
- (10) マンハイム, K., (長谷川善計訳)「現代の診断」, 樺俊雄監修『マンハイム全集』5, 潮出版, 1976年, 306頁。

ただ, シェルスキーに依れば, マンハイムの一連の当該論文は, 青年社会学的観点 (der jugendsoziologische Aspekt) を超え出た, いわば全体社会的観点 (der gesamtgesellschaftliche Aspekt) に立脚するものであり, その意味でマンハイムの青年論は政治社会学であるとみている。Vgl., Schelsky, H., “Die Skeptische Generation”, Eugen Diederichs Verlag, 1957, S. 26 ff.

- (11) 日高六郎「世代」, 『図書』, 1968年1月, 8頁。
- (12) 斎藤耕二「社会化の連続と不連続」, 斎藤耕二・菊池章夫編著『社会化の心理学』川島書店, 1974年, 289頁。
- (13) 早坂泰次郎『世代論』, 日本YMCA同盟出版部, 1967年, 22頁。
- (14) 戦後世代論の三つの系列として, 彼は次のように整理する。①知識人のあいだで展開された世代論, ②風俗的世代論, ③民衆の生活と感情とイデオロギーの中の世代的断層論, 日高六郎「世代」, 岩波講座『現代思想』XI, 岩波書店, 1957年, 127頁。
- (15) 彼は言う。「世代論争の中心は, 戦争責任, そして転向という知識層にとって最も切実な問題に, 多かれ少なかれ, 関連している」, 日高六郎『現代思想』XI, 128頁。
- (16) 大野明男, 前掲書, 185頁。
- (17) 大野明男, 前掲書, 141頁参照。
- (18) 大野明男, 前掲書, 37頁。
- (19) 早坂泰次郎, 前掲書, 50頁。
- (20) 早坂泰次郎, 前掲書, 53頁。

- (21) 日高六郎『現代思想』Ⅺ, 131頁。
- (22) 小林文人「青年期をどうとらえるか」, 『教育社会学研究』第22集, 1967年, 12頁。
- (23) Davis, K., “The Sociology of Parent-Youth Conflict”, ASR, Vol. 5 No. 4, 1940, pp. 523—535.
- (24) しかし, 親子間の年齢差は, 相対的には一定ではない。つまり, それぞれが年齢を重ねるにつれ, 年齢差のもつ意味が徐々に低下してくるからである。また, 社会化度の逡減についても, とりわけ青年期以降は, 両者の葛藤を徐々に少なくする方向に作用する。Davis, K., *ibid.*, p. 525.
- (25) Davis, K., *ibid.*, p. 524.
- (26) 厳密に言えば, 「B—B'」の関係は, 「B—C—B'」の合成された関係として存在する。
- (27) なおこの点に関して, 世代分析の実態調査をする上で留意すべき点は, 次を参照。児島和人・秋山登代子「世代ギャップの構造」, 『NHK放送文化研究年報』17, 1972年, 53頁。
- (28) 彼が端的な例として「ドイツ青年運動」を引き合いに出している点からすれば, 「B—B'」関係も十分射程に入っていると推察される。Eisenstadt, S. N., ‘From Generation to Generation’, Free Press, 1956, p. 33.
- (29) Eisenstadt, S. N., *ibid.*, p. 43.
- (30) なお彼は, 年齢同質的関係の生じる理由として, 帰属的地位に基づかない役割配分が行われることと共に, 家族構造が若者の役割を抑制し引き延ばす点も, 指摘している。Eisenstadt, S. N., *ibid.*, pp. 54—55.
- (31) Eisenstadt, S. N., *ibid.*, pp. 32—33.
- (32) シェーラー, M., 「道徳形成におけるルサンチマン」, (秋元律郎・田中清助訳), 『マンハイム シェーラー 知識社会学』現代社会学大系8巻, 青木書店, 1973年, 231頁。
- (33) Feuer, L. S., ‘The Conflict of Generations’, Basic Books, 1969, p. 25.
- (34) Feuer, L. S., *ibid.*, Preface viii.
- (35) Feuer, L. S., *ibid.*, p. 38.
- (36) Feuer, L. S., *ibid.*, p. 33. ただし, フォイヤーによれば, かかる心理的メカニズムが現象として生起するには, 社会的政治的状況の触媒が必要である, としている。cf. Feuer, L. S., *ibid.*, p. 38.
- (37) このように, 学生運動を世代闘争として見立てる立場は一応認められる(ほかに, 例えば, 副田義也「世代と世代文化」, 副田義也ほか著『現代社会学』NHK市民大学叢書33, 日本放送出版協会, 1975年, 157頁)にしても, それを純然たる「C—B'」関係としてのみ割り切ることには異論があろう。

教育における世代論

また、本稿の文脈とは若干それるが、マートンはこうした「C—B'」関係を相対的年齢 (relative age) なる概念によって表し、学界の評価制度 (referee system) を論じている。cf. Merton, R. K., 'The Sociology of Science', The University of Chicago Press, 1973, p. 543.

更に、グールドナーも同様な見地から、知識人特有の負け犬 (under-dog) 的観点について論じている。cf. Gouldner, A. W., 'For Sociology', Allen Lane, 1973, pp. 42—44.

- (38) オルテガ, (井上正訳), 「現代の課題」, 『オルテガ著作集』1, 白水社, 1969年, 185頁。
- (39) Schelsky, H., a. a. O., S. 26.
- (40) 新睦人「世代の概念」, 『ソシオロジ』, 第9巻第2号, Vol. 29, 1962年6月, 76頁。
- (41) 高原健吉「占領と世代」, 思想の科学研究会編『共同研究日本占領』, 徳間書店, 1972年, 160頁。
- (42) 松下圭一「戦後世代の生活と思想(E)」, 『思想』, 1959年7月, 12頁。
- (43) 注(21)参照。
- (44) 注(28)参照。
- (45) マンハイム, K., (鈴木広訳)「世代の問題」, 『社会学の課題』マイハイム全集3, 潮出版, 1976年, 167頁。
- (46) 豊沢登, 「青年の問題性」, 豊沢登・平沢薫編著『青年社会学』, 朝倉書店, 1953年, 38頁。
- (47) 高坂正顕, 前掲書, 38頁。
- (48) 児島和人・秋山登代子, 前掲書, 52頁。
- (49) その例としては, 同上書, 97—99頁。
- (50) 清水幾太郎「世代の役割」, 岩波講座『教育』第7巻, 1952年, 8—9頁。
- (51) しかし, 二関も言うように, 世代間葛藤が必ずしも顕在化するとは限らない。二関隆美「青年文化の問題」, 『大阪大学人間科学部紀要』Vol. 1, 1975年, 225頁。
- (52) 塩原勉「青年問題への視角」, 『社会学評論』第22巻第2号, 1971年, 5頁。